

◎小学生の部

太田玉茗賞

はじめてメガネをかけた日

三田ヶ谷小学校 四年

岩崎 朱里

「世の中のいろいろなものが見えなくて損をするよ」

黒板の字がみえなくなり とうとうメガネをかけた

「わあ、見える」

はじめてメガネをかけたのは暑い夏の日

ぼくの目の前に広がった三田ヶ谷田んぼは

風にゆれて大波小波の緑の海

どこまで続くのか遠い遠い青い空

朝どりのカリフラワーのような

真っ白な入道雲

みんなキラキラかがやいて

「夏だあ」と言い合ってるみたい

海もないし 山もない

でも なんて美しいのだろう
ぼくが生まれ 住んでいる羽生は

「メガネをかけてよかったでしょう」

少しめんどうくさくて かっこ悪そう

はじめてかけたメガネは何か変

「キーン シュルシュルシュルシュル…」

ぼくが立っているオーバー陸橋の下

たくさんの車が走りぬけてゆく

まるで血液が血管を流れる動画のよう

東北じゅうかん自動車道だ

アクアラインみたいに緑の海を走る

「四里の道は長かった」と言われた

羽生の道

今 ハイウェイとなって北の国へと続く

メガネをかけるといろいろなものが見える

いっぱい感動してドキドキした

でも 見えない方がよかったこともある

道ばたにすてられた大量のゴミ

美しいふるさと羽生にはにあわない

ぼくたちのふるさとを大切に作る心のメガ

ネもかけたいなあ

「住みよい街」に選ばれた羽生の街だもの

宮澤章二賞

あの一年生の教室

手子林小学校 二年

笹嶋 清乃

わたしは小学二年生

今年、一年生が入学してきた

「二年生は、一年生のお手本です。」

校ちよう先生の言ばだ

びっくりした

わたしが

お手本!

心ばいだつた

「大じようぶです。」

お手本になれます。」

一年生の時のくどう先生が

おうえんしてくれた

ホツとした

このままでいいんだ

二年生の教室のまどから

一年生の教室が

見える

見てる

あの一年生の教室で

たくさんたくさん

べんきようをした

はじめて学んだかん字

はじめて学んだけいさん

あさがおかんさつに

ずこうせいさく

ピカピカだつたふでばこは

ふたがやぶけた

今は二こ目のふでばこ

きゆうしよくも

二年生で

はじめて

ペロリンしようにもらった

むかしのわたしは

がんばっていた

今のわたしも

がんばっている

優秀賞

じいちゃんのたんぼ

須影小学校 一年

江原 清眞

五月のある日

じいちゃんのたんぼに

みずがいっぱいになったよ。

みずうみみたいだった

そのたんぼのなかに

おねえちゃんといっしょに

はだしではいって

おいかけっこをしたよ。

ぼくのあとから 大きいかえると

小さいかえるが おいかけてきて

とびはねて いっちゃんだんだ。

ぼくが かえるをおいかけて

つかまえようとしたけれど

すごいスピードでにげられちゃった。

たんぼのみずが

キラキラまぶしくひかっていた

ころんで だろんこになったよ。

たいようのひかりがまぶしくて

ぼくとおねえちゃんの

うでもあしも

まっかつかになった。

モーターでみずをくみあげている

かわのみずがつめたくなって

きもちよかった。

ぼくは じいちゃんのたんぼで

おもいつきりあそんで

かえるやアメンボをおいかけるのが

だいすきなんだ。

わたしのじいじ

新郷第二小学校 六年

村田 心優

「あ、ハイエース！じいじかな？」
下校の時にじいじの車を見た
新築中の家に横付けされた車
たぶんじいじだ

わたしのじいじは電気工事の仕事をしている
大工さんが作った家に電気を通す仕事だ
ひいおじいちゃんも同じ仕事をしていた

じいじの車にはたくさんの仕事道具
電線、脚立、ネジ、ペンチ：
じいじの車に乗ると
機械のにおいとタバコのにおい
タバコの箱と缶コーヒーが二、三個
タバコをやめられないじいじ

わたしはじいじが大好き
わたしのことをほめてくれるじいじ

遊びに連れて行ってくれるじいじ
買い物も一緒に行く

今年もウナギを買ってくれて
わたし達が食べるのを見てニコニコしていた

じいじの腕はまるでポツキーのよう

わたしのお父さんより太い

屋根の上に登ってアンテナを付け
汗だくになって天井の裏にもぐる

今までじいじのつけた明かりは

どのくらいあるのだろう

明かりの下にたくさんの笑顔があるといいな

わたしの自慢のじいじ

今日もあの車で現場へ向かう

日本の色 ジャパンブルー

須影小学校 六年

吉成 勇人

「この真っ白な布が一体どうなるのか…」

ビー玉を包んで輪ゴムでとめていく

この時からワクワクしていた

課外授業で 藍染め体験がある

準備したその布を

藍の染料につけ

樽の底に落ちないように

染めていく

樽から出したその布は

藍より深く濃い色に変化し

ポタポタと藍の雫が落ちていく

そして しぼっていくと

もつと藍の雫が落ちていく

模様が出てきた

輪ゴムを外すと

ビー玉が転がっていった

洗っていくと

模様がくっきりと現れて

染料が水と共に流れていった

またしぼり 藍の布を広げると

空を見上げる青い紫陽花のようだった

干した藍の布は風にふかれ

太陽の光が木漏れ日のようにやさしく

そして 美しく透けていく

「ジャパンブルー」

それは

藍 四十八色を意味する特別な色

明治時代に日本を訪れた外国人が

ジャパンブルーと言った

今でもサッカー日本代表の

ユニホームは 藍 四十八色の色だ

過去と現代は

藍でつながってるようだ

「藍染めは生きている」

そう思った

日本全体が藍でこれからも

未来へとつながっていくように

そう願う

奨励賞

いろがかわるどて

川俣小学校 一年

いとう ゆうあ

わたしのいえのうらには
どてがある

とねがわもながれている

はるのどては、きいろいろ

なのはながさき

ちようちよがとんでいる

ぼかぼかしてきもちいい

ねむくなる

なつのどては、みどりいろ

せのたかい、げんきなくさが

はえている

とねがわのみずが

きらきらまぶしい

あきのどては、いろんないろ

きみどりのくさ、ちやいろのくさ

なかよくゆれている

ぼったがぴよんぴよんとんでいる

こおろぎがうたをうたっている

ふゆのどては、しろいいろ

ゆきがきらきら

ひかってる

あるくと、しゃりしゃり

おもしろい

いつものどてじゃないみたい

はる

なつ

あき

ふゆ

どてはいろいろかわってく

いろもにおいもかわってく

そんなどてがだいすきだ

弟のぺったん

新郷第二小学校 三年

大風 凜音

毎年六月三十日と七月一日は

せんげん神社ではつ山まつりがある。

この一年間に生まれた赤ちゃんのおでこにはんこをおす。

びよう気をしないで

元気に育つようにという

ねがいがこめられているそうだ。

もうすぐ一才になる弟をつれて

せんげん神社の長い階段を上ると

はんこを持った人が立っていた。

弟のおでこにぺったん。

弟は目をまんまるにして

お父さんにしがみついた。

こわかったのかな。

「お姉ちゃんに本当にそっくり。」

わたしも目をまんまるにして

しがみついていたそうだ。

お母さんがわたしのぺったんの

思い出を話してくれた。

おさいせんばにお金を入れて

ガラランガラんと鳴らし手を合わせる。

中に入っておいのりをしてもらった。

わたしも心の中でおいのりした。

「弟が元気に育ちますように。」

おばあちゃんとお母さんとぼく

羽生南小学校 四年

大屋 竣葵

「ピンポン、ピンポン、ピンポーン」
ぼくのおばあちゃんは元気だ
家が近いのでよく行き来する
これがおばあちゃんが来たよ！の
チャイムの合図

ぼくのお母さんは
おばあちゃんが来ると
子供みたいだ
片付けなよ

洗たく物たたんで
あれやりな、これやりな
と、言われる

ぼくがお母さんに言われているみたい

でもお母さんはおばあちゃんに
上手に甘えるんだ
夕飯一緒に食べたいな

あれ買って、これ買って
と、言っている

ぼくがお母さんに
お願いしている時と一緒にだな

お母さんはおばあちゃんの子供
ぼくはお母さんの子供
あはは。二人とも子供だね

おばあちゃんとお母さんも似ているな
ぼくとお母さんも似ているな
と、言う事は
ぼくとおばあちゃんも似ているんだ
なんだか面白いな

来年もこの先も
おばあちゃん、
お母さん、
ずっと元気でいてください。

おじいちゃん

新郷第一小学校 三年

関根 琉聖

つゆ明けの次の日

ぼくのおじいちゃんは

つえと少しのお金を持って

旅に出た

だからぼくは一日一回

おじいちゃんの写真にお話をする

学校に行く前だったり

帰ってきてからだったり

ねる前だったり

いろいろだけど

お線香を立てて

小さなかねをならしてから

手を合わせて

心でお話をする

おじいちゃん、もうついた？

先に行っているはずの

クッキーとコロスケには会えた？

ぼくは今日

クロールでいきつきができたんだよ

今日のごはん

すぐおいしかったんだ

おじいちゃんは、何食べた？

せつかくとうちやくしたのに

おぼんには、また帰ってくるんだって

天国に行っても、いそがしいんだね

気をつけて帰ってきてね

だけどなんだか

おじいちゃんが近くにいる気がするんだ

天国にいるはずなのに

ふしぎなんだ

手をつないで！

手子林小学校 三年

堀口 佳奈

「手をつないで」

道路を歩いてるときに

よくお母さんが言う

「キッキー。」

ブレーキをかける車もいる

もう三年生だから

手をつながなくても大じょうぶなのに、

わたしより小さな子だって手をつないでない

もう三年生なのに、はずかしい

スーパーマーケットにいくときに、お母さん

が言う

車からおりると言われる

「手をつないで」

へいきへいき

それなのに、いつのまにか

手をつないでる

もう三年生なのに、なのに…

すなおにつなぐ時もある

つなぎたくない時もある

なのに、なのに…

「手をつないで」

へいき大じょうぶ

もう三年生だから

車にひかれて

死んでしまった子のニュース

お母さんの顔 かなしそう

お母さんの思いがわたしには、わかった

だからわたしは、

手をつなぐ

ぎゅつと

でも少しやさしく

手をつなぐ

その他の良い作品

作品は羽生市のホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
私のすきな通学路	須影小学校 五年	江原 知花
かんべえまつ	新郷第一小学校 二年	柏瀬 百花
思い出の早稲田堀	岩瀬小学校 六年	木村 灯
さかなとバトル	須影小学校 二年	紺野 伊吹
これまでも これからも	手子林小学校 六年	鈴木 琴子
ぼくのいえ	新郷第一小学校 二年	須永 陽太
ほわほわびんくのプレゼント	羽生南小学校 三年	関根 伶
たくさんの声	羽生南小学校 二年	高鳥 圭史
てんのうさま	須影小学校 三年	根本 結愛
わたしの通学道	手子林小学校 四年	盛田 早織

◎中学生の部

太田玉茗賞

今を生きる

南中学校 三年

木村 愛

私は二〇〇三年八月六日に生まれた。四人姉妹の末っ子として。

物心ついたときから、整備された道路に、整った環境、病気になったら、かかりつけの医院に行き、当たり前のように薬をもらう。今、目の前に広がる光景全てが当たり前のように感じていた。

自分の誕生日、当たり前のようにテレビをつけると、ニュースでは、どのチャンネルでも必ず放送されていること。

八月六日、その日は初めて

原子爆弾が広島に投下された日。初めてそのことを知ったとき、ドキッとした。

自分の生まれる七十年近く前に、落とされた一つの爆弾は、

広範囲の建物を、生物を、激しい爆風と高温で破壊したのだろう。

今日の日本では、日本国憲法第九条によって戦争をしないことが決められている。

今の平和は、日本が戦争を経験したからこそ、存在しているのではないだろうか。

時間は未来に向かって、流れ続ける。止まることもなく永遠に。

ただど生物の心臓はいつかは止まる。

そのいつかはいつ来るのだろうか。

戦争がなくなった日本に生まれた私。

戦争で一瞬で命を失くす心配がない今。

戦争の時の生活と今の生活は、全く違うだろう。

だけど、人として体内に流れる赤い血は、

昔も今も変わらない。

胸に手をあててみる。

ドクンと強く脈打つ鼓動。

体内を流れる赤い血液。

私は今を生きている。

いつか体の全てが止まるまで、

巡り会えた家族、親戚、友達を大切に、

今の時間を未来に向かって強く生きよう。

宮澤章二賞

家庭菜園の四季

南中学校 二年

高鳥 涼

僕の家が家庭菜園に
ふわりふわりと春が来た
苺に白い花をさかせ
白い実をつけててんと
赤い実になり
つやつやとした肌の実を
よく見ながら食べると
いままでの苦勞が身にしみて甘ずっぱい

僕の家が家庭菜園に
じんじんと夏が来た
なすに紫色の花を咲かせ
西瓜に黄色い花を咲かせ
やつと夏が来た
やがて夏の終わり頃に

顔と同じ大きさのなす
黒い独特な曲線の模様で緑色の西瓜
これらをおいしく頂きます

僕の家が家庭菜園に
そろりそろりと秋が来た
葉が茶色く濁ったように
枯れ始める
外から落ち葉が雨のように
風で家庭菜園に降ってきて
枯れ葉の水たまりができて
歩くと靴の中に入ってきそうだ

僕の家が家庭菜園に
きんきんと冬が来た
葉もまったくなく
すべて何もかも
なくなってしまう
ああ 春よこい 春よこい
と叫ぶと風がいつそう強くなり
いつそうさびしくなる

僕の家が家庭菜園に・・・

優秀賞

初の晴れ舞台と夢

南中学校 二年

藤井 萌恵

八月三日

いざ 決戦の日

このきれいな茶色の文化ホールで

私達は夢を奏でる

産業文化ホールでは

吹奏楽コンクール東部地区大会が行われる

このコンクールで三年生は引退になる

二年前までは憧れながら遠くで弟と

楽器を搬入する中学生を見ていた

一年前は舞台そでで三年生の先輩の

最後の晴れ舞台を泣きながら見ていた

そして今 ついに今日は

私とその晴れ舞台に立っている

一年前に流した涙と

今まで練習してきたことを胸に

一つ一つの音を奏でる

演奏していると 今までの練習風景が浮かび

アルバムの様に一つずつめくられていく

全然そろわなかった日

とても上手くできた日

色んな事を思い出しながら 終わりに向かう

最後の音の響きがなくなつて

大きな拍手が私達を包み込んでいく

私達の音が満席の大ホールに届いた

その嬉しさが こみ上げてきた

しっかりと演奏できた自分が誇りに思えた

引退していく先輩を見て 次は私だと思つた

先輩が残してくれた伝統と思いを

私達が後輩につないでいく

来年はさらに良い音を奏でると誓つた

二年前の私の様に 憧れながら

私達を見てくれている人がいるといいな

私とひいおばあちゃんの朝

東中学校 一年

間下 薫

「行ってらっしゃい」

「行って来ます」

一年前までは、これが普通だった

私のひいおばあちゃんは、何ヶ月か前に老人ホームに入った

いつもひいおばあちゃんが見送ってくれる所には、ひいおばあちゃんはいない

ある日、ひいおばあちゃんが久しぶりに何日間か家に帰ってくるようになった

その時ひいおばあちゃんは、はなしてくれた老人ホームの窓から、私と同じくらいの子が毎朝、登校するのが見えると、自分の孫も今頃、重いランリュックを背負って登校してるのかなと

毎日毎日、私を見送ってくれていたひいおばあちゃんにとつては、私を見送れなくなったことに少しさみしさをいんでいる

私も毎朝、登校する時にひいおばあちゃんと

同じくらいの近所のおばあちゃんと、あいさつをかかわす

その時、私はいつもひいおばあちゃんとの

「行ってらっしゃい」

「行って来ます」

を思い出す

今では、私とひいおばあちゃん、この言葉をかわすことはできなくなった

それでも、今日も明日も私とひいおばあちゃん

「行ってらっしゃい」

「行って来ます」

を思い出す

祖母の家の匂い

東中学校 一年

吉田 千紗

祖母の家

見わたす限り、田んぼ、畑ばかり

「こんにちは」

玄関の戸を開けると

これが田舎の匂いなのだろうか

お線香の匂い、大地の匂いがする

祖母の家の玄関には畑から収穫した野菜と

庭に咲いた花がかざられているので季節によ

って匂いは違う

春には、桜や梅の花の甘い香りと、じゃがい

も・玉ねぎ・ふきの湿った土の匂いがする

夏には、蚊取り線香の匂いと、トマト・きゅう

り・なす・スイカの甘ずっぱい匂いがする

秋には、きんもくせいの強い匂いと、稲刈の

乾いた匂いがする

冬には、すいせんやキクの仏様のような匂いと大根・はくさい・ねぎと、冷たい匂いがする

一年を通し、同じ匂い

それはお線香の匂い

先祖代々の位牌が並ぶ仏壇に

いつもお線香を祖母があげているからだ

「ばあちゃん！ばあちゃん！」

奥にいた 祖母が顔を出した

「あら、ちいちゃんきたのかい」

笑顔で近寄ってきた祖母・・・

あ・・・玄関の匂い

あ・・・祖母の匂い

同じ田舎の優しい匂いがする

奨励賞

ふるさとのそら

東中学校 二年

池田 和佳奈

いつもの帰り道
自転車のペダルを踏めば
そよ風がきもちいい
横を見れば 田んぼと畑
見慣れた 緑の景色が広がる
ずっと遠くには 住宅地
そのずっと ずっと遠くには
赤と オレンジと 水色と 青の
そらが 広い 広い そらが
どこまでも 広がっている
目の前の夕日がつくった
今日 この時間だけの そら
私は ちよつと 自転車を止めて
その グラデーションを 眺める
辺りには 誰もいない

なんだか そらを独り占めしているみたい
今日は 私の真上に 雲が浮かんでいる
赤い光に当たって 赤く染まっている
この雲はどこに行くんだろう
そんなことを考えていたら
いつの間にか
そらは 青ばっかりになっていた
遠くの住宅地のほうで
ちらほらと 黄色の光が見え始めた
もう 家に帰らなきゃ
ペダルに 足をかけた
私の家からは そらがよく見える
今日のそら 昨日のそら 明日のそら
朝のそら 昼のそら 夜のそら
そらの表情は無限にある
いつも違う けれど そらはそら
いつもそこにある
そう考えると 不思議
今日 窓から 見上げたそらは
いつもと変わらず 青色だった

未来の自分へのプレゼント

東中学校 二年

権代 充輝

夏休み、中学二年生になった僕は、
母校の小学校へ行った。

何も変わっていない校舎や校庭、
それを見て僕は安心した。

でも、あれ？

遊具庭だけは違和感があった。

あの時大きく感じた鉄棒が、
とつても小さく感じた。

他にも、ブランコ、すべり台、うんてい、
全部が小さく感じた。

「たった二年だけど、大きくなったんだ。」
僕は成長とともに時を感じた。

すると、頭の中で、小学生の僕の映像が映
しだされた。

ブランコでどつちが高くこげるか、競って
いる僕。

鉄棒で、逆上がりができるように、何度も
練習している僕。

だるまさんが転んだをして、遊んでいる僕。
いろんな僕がここにはいた。

毎朝やった、朝マラソン。

汗をかき、頑張った運動会。

とても辛かった持久走。

思い出は昨日のことのように浮かんできて、
ふと、笑みが浮かんだ。

何度も何度も競い合ったりしたトラックが、
そこにはあった。

この先どんな思い出は増えていく、そして、
時々僕は、それらを思い出して「ふふふ」と

一人で笑っていると思う。

思い出は、未来の自分へのプレゼントだ。

だから、いろいろな経験をし、楽しく過ごし、
たくさんの思い出を作って、

未来の自分をたくさん、たくさん楽しませて
やろうと思う。

朝のルーティン

西中学校 二年

島田 眞希

私の家は祖父母と二世帯同居。

私達は二階に住んでいる。

朝、学校に行く前

一階の仏壇の部屋へ行き

お線香に火をつける。

「チンチーン」

御鈴を鳴らすと

祖父と祖母がそろってやってくる。

「眞希、もう学校行くんか。」

朝早くから頑張ってるね。」

と、私が仏壇に手を合わせている後ろで声をかけてくる。

そして、母と一緒に玄関まできて三人そろって見送ってくれる。

「今日は暑くなるから気を付けてね。」

「たくさん水分取るんだぞ。」

「テニスうまくなつたか？」

など他愛のない言葉を交わし

「行ってきます。」

「行ってらっしゃい。気を付けてね。」

そして門を出た後振り返って手を振る。

祖父、祖母、母が三人そろって笑顔で私に手を振っている。

毎日の光景。

いつものルーティン。

でも、これをして家を出ないとなんだか不安。家族に見守られながら朝の光に照らされて家を出発すると、

「今日も一日がんばるぞ！」

という気持ちになるから不思議。

ご先祖様も、もしかしたら応援してくれているかもしれない。

面と向かつては言えないけど、

「いつもありがとう。」

いつか桜が咲いたら

東中学校 一年

鳥海 あかり

今年の春。私は中学生になった。

初めての自転車通学。

初めての通学路。

入学する前、家族で参加した桜の植樹。

まだ寒さの残る中、家族五人で出かけた。

植樹の場所は、春から通う

中学校への通学路の途中。

母が、

「あれがこれから通う中学校だよ。」
と言った。

植樹場所から見える中学校。

桜を植えながら見つめた中学校。

「桜が咲くのが楽しみだね。」

母が言った。

父も、そうだね。とうなずいた。

自分で植えた桜の花が咲くのが

とても楽しみになった。

まだ咲くはずもないけど

桜並木をながめながら自転車で走る

自分の姿を想像してみた

今日も自転車をこぎながら

中学校へ行く。

通学路。

未来の桜並木を通りすぎ

いつもよりペダルが軽く感じた。

私の顔がほころんだ

遙かなる地で

東中学校 二年

福島 尊翔

おじいちゃんが亡くなって一年

その知らせを聞いたのは

夏休みの旅行で訪れていた北海道の地

昨日「お土産、楽しみにしててね。」

と、言ったばかりだった

「え!?うそ!!」言葉が出てこなかった

急性心筋梗塞だった

うそであって欲しいと思った

お母さんが泣いた

僕も悲しくなって泣いた

最終便でおじいちゃんの元へ

呼んだら今にも起きそうな寝顔

笑みを浮かべているかのようにさえみえた

その姿は安らかだった

みんな泣いた

僕がお母さんのお腹の中にいた時

脳梗塞で倒れ、半身不随になってしまった

学生の頃は、スポーツ万能だったという

僕の知っているおじいちゃんは

病氣と戦う真面目な努力家

一番の自慢は、誰にでも優しいこと

葬儀の日、御住職の粹な計らいを知った

先に亡くなったおばあちゃんの戒名に『日』

おじいちゃんには『日』の文字

「太陽」と『月』

絵にかいたような二人三脚

おばあちゃんが亡くなって十三年

おばあちゃんの所に行きたくなかったのかな?

再会できて良かったね

二回目の結婚式をあげたかな?

いつまでも仲良くしてね

そして、思い切りスポーツを楽しんで下さい

大好きなお酒を飲んで下さい

長い間、お疲れ様でした

遙かなる地でゆっくり休んで下さい

僕、頑張るよ!!おばあちゃんと見ていてね!!

その他の良い作品

作品は羽生市のホームページでご覧いただけます。

題	学校名・学年	氏名
ゆかり	西中学校 二年	柏瀬 有花
ヒマワリ	東中学校 三年	金子 彩佳
私の青春	東中学校 一年	木宮 実羽
祖父の野菜畑	東中学校 一年	木村 光
かえる	東中学校 三年	窪寺 紗弥香
バレーが夏	南中学校 二年	小磯 百萌
ふるさとの色	西中学校 二年	五月女 紗也
なんじゃもんじゃの木	東中学校 三年	鈴木 愛理菜
私の通学路	東中学校 一年	富永 晴日
私の通学路	南中学校 一年	渡辺 陽菜

第十四回 小中学生「ふるさとの詩」

募集要項

利根川の流に生まれ、四季おりおりの美しい自然に恵まれた羽生市は、日本の近代詩史に名をとどめた、太田玉茗を生んだまちであり、田山花袋の小説『田舎教師』のふるさとのまちです。

また、羽生市出身の宮澤章二は、市内の多くの校歌を作詞した詩人です。

この二人を郷土の偉人として尊敬し、顕彰するためにも、みなさんの「ふるさと」を一篇の詩にして、応募してみませんか。

●募集作品

- ・ 「ふるさと」を題材とした作品、または自由題
(家族、友だち、自然、伝統行事など、心に感じたことを書いてください。)
- ・ 自作で未発表の作品(過去に書いた作品でも構いません。)
- ・ 応募作品数は一人1篇

●応募方法

- ・ 400字詰め原稿用紙B4縦書、表題・氏名・本文で2枚以内の作品。
- ・ 各学校で取りまとめ、名簿を添付のうえ提出をお願いします。

●応募資格

- ・ 市内の小学生・中学生

●応募締切

- ・ 平成30年9月7日(金)

●発表

- ・ 平成30年11月下旬に通知

●賞

- ・ 小学生の部・中学生の部
各部門とも、太田玉茗賞 1篇、宮澤章二賞 1篇、優秀賞 3篇、奨励賞 5篇
- ・ 賞状と盾を贈呈します。

●その他

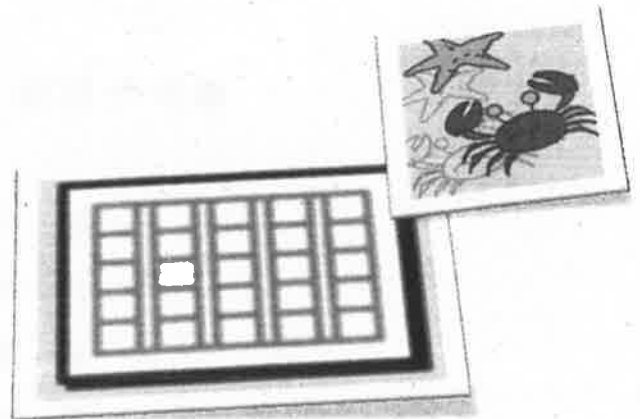
- ・ 応募作品の著作権は主催者に帰属し、作品は返却しません。
- ・ 入賞者の作品・氏名・学校名・学年については、広報及びホームページに掲載するほか、報道機関等に公表します。

●主催 羽生市

●応募・問合せ先

羽生市役所 秘書広報課

〒348-8601 羽生市東6-15 Tel.561-1121(内線204)



●第十四回 小中学生「ふるさとの詩」募集結果

小学生の部	972篇
中学生の部	873篇
応募総数	1,845篇

●選考委員（五十音順）

塩田 禎子
根岸 光子
蓮見 典昭
萩原 澄江
水野 栄子

発行者 羽生市総務部秘書広報課

発行日 平成31年1月16日